

成田市龍正院貝塚の採集資料

渡 辺 修 一

はじめに

2019年12月、東庄町立東庄中学校長（当時）石橋宏克氏より、成田市龍正院貝塚（大原野貝塚）の一部が更地になって貝層が露呈しているようだとの連絡があった。早速同月29日に石橋氏とともに現地を訪れたところ、かつて奈和同人会によって部分的な調査が行われた¹⁾ 旧下総郵便局の敷地であった一部が確かに更地になっており、地表面に貝層のヤマトシジミが散布している状況が観察された。そのため、遺跡の状況を把握すべく、時期が判別できる土器片の一部と貝輪等の遺物を採集した。本稿は、その際に採集した遺物の採拓、実測、写真撮影を行って報告するものである。

当該地は成田市滑川1085-1、県道江戸崎下総線に面し、天台宗の古刹である龍正院（滑河観音）の西側に位置する（図1・写真1）。現地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「竜正院遺跡」に含まれる²⁾。遺跡名に、

重要文化財「竜正院仁王門」と県指定有形文化財「龍正院本堂」と同様に二種の用字がみられるが、本稿では貝塚について当初報告された際に使われた「龍正院貝塚」と呼称することとする。

1 貝散布及び遺物散布の状況

現地の表面観察では、県道側の貝散布は薄く道路際ではほぼみられないが、逆に北西側の約半分には全体に貝散布が観察され、宅地との境界付近は濃密であった。奈和同人会の調査では、今回の観察地点の西側隣接地点で、純貝層と混土貝層を合わせて厚さ50cm前後の貝層を調査しており、その貝層が東に伸びていることが想定された。また、貝散布は北西側の宅地や北東側の畑地でも観察されることから、旧郵便局敷地にとどまらずさらに拡がりをみせることがわかる。貝散布が確認される隣接宅地のさらに北西側は1m以上の



図1 遺跡の位置（約1/3,750）



写真1 遺跡周辺航空写真(国土地理院 CKT20104-C13-16)

写真2 遺跡全景
(2019年12月29日)



写真3 貝散布状況
(2019年12月29日)



写真4 現況
(2022年12月13日)



段差があり、さらに数十mで現水田面に至る。

遺物は、縄文時代晩期後葉の土器片を主体に貝散布の濃密な範囲に散見された。表面を観察する限り露呈している遺物量は少なかった。

なお遺跡の現況は、盛土を行ったうえで、隣接する民間企業の砂利敷き駐車場となっており、貝塚本体は現状保存されている（写真4）。

2 縄文土器（図2・写真5）

縄文時代後期から晩期の土器片19点を図示する。1は縄文後期後葉、加曽利B2式の鉢形土器である。胴部上位の破片で口縁部に向って内湾する形状。最大径付近に遺存部内では1条の縄文帯が巡り、縄文帯の上下は横位のケズリの後に横位のミガキが施される。縄文は単節RLの横位施文である。

2は縄文晩期後葉の浅鉢形土器で、浮線網状文が施される小破片である。3分岐のレンズ状浮線文を単位としている。3、4も浅鉢形土器の破片で、おそらくいずれも浮線網状文による文様帯の下端部から下の破片である。内外面ともに横位のミガキにより丁寧に仕上げられている。

5は有文の深鉢形土器の小破片である。小片のため全体の文様構成は不詳であるが、上位の文様帯は先に地文として横位の撚糸文を施した後に密な沈線を描いており、さらにその後から匹字状の沈線を描き加えることで変形工字文を形成しているようにみえる。文様帯直下は横位の撚糸文がみられるが、基本的には縦位に近い斜位の撚糸文が施されている。

6は甕型土器の口縁部から肩部の破片である。薄く摘み上げられたような口唇部はわずかに外に屈曲し、不規則な刻目が加えられる。刻目は絡条体を押圧することによって施されるようである。口縁部直下には、5mm程の幅で横位の撚糸文が巡っている。やや反りながら内傾する頸部は横位から斜位のミガキによって丁寧に仕上げられ、屈曲する肩部以下には斜位の撚糸文が施される。胴部内面はケズリの後ナデ、頸部内面はケズリの後にミガキで調整される。なお、この土器の口頸部は粘土紐の外傾接合によって、肩部以下は内傾接合によって成形されている。

7、9も同種の甕型土器の破片である。7は器壁の厚みのある大型品で、先に肩部以下の撚糸文を斜位に施した後で、頸部を横位のヘラナデによって調整している。内面の調整は丁寧ではなく凹凸が残るが、ヘラナデとヘラ状工具痕がよく観察される。9も肩部以下

の撚糸文を先に施しておいて、その後に頸部のヘラナデ調整を行っている。内面の調整もおそらくヘラナデである。この個体の肩部撚糸文はほぼ横位に施され、条間も他とは異なり疎である。

8、10、11も撚糸文を施す破片であるが、胴部中位以下の破片であるため、深鉢形土器か甕形土器かの判断はできない。いずれも斜位の撚糸文であるが、その回転方向は肩部付近とは異なり縦位に近い。なお、10の上縁は、内傾接合の接合面で破断している。

12は肩部以下に細密条痕を施す甕形土器である。この個体は、頸部の遺存率が悪いため不明ではあるが、頸部に沈線文様を有している。上端にはわずかな幅ではあるが、水平に巡る可能性がある沈線がうかがえ、肩部直上には短い2条単位の沈線もみられる。沈線以外の頸部はヘラナデによって調整されており、頸部内面も同様であるが、肩部以下の胴部内面は丁寧なミガキによって調整されていることから、液体を貯めるあるいは調理する容器であったことが推察される。なおこの個体の条痕は、一部に繊維の撚りがうかがえる箇所があるので、絡条体を回転させずに擦った絡条体条痕とみられる。

13～17も細密条痕が施される破片である。13の条痕は一部に比較的鋭い先端が当たった痕跡がうかがえるため、茎束状の原体であった可能性がある。14は条痕の方向が縦位に近いので、胴部下位の破片と考えられる。この個体についても、13と同様の理由で茎束状の原体であった可能性が高い。15は底部近くの破片である。この個体は絡条体条痕である可能性がある。16は13、14と同じように条痕の条の一部に鋭い部分が観察され、茎束条痕の可能性はあるが、単位幅で表層の粘土が動いている箇所が見受けられ、茎束状原体であったとしても密に固く縛られたものであったと考えられる。17はおそらく絡条体条痕である。これらの土器片のうち、13～16についてはいずれも内面がミガキまたは丁寧なヘラナデによって平滑に仕上げられており、先述のように液体を扱う容器であった可能性がある。

18は、条の幅と間隔が一定で規則的な波形を呈していることから、今回の採集土器で唯一の貝殻条痕が施されたものと思われる。胴部下位と推定される破片でありながら、この前後の時期の深鉢形土器や甕形土器にしては丸みを帯びており、断定はできないながら比較的小型の壺形土器であった可能性が想定できる。内面の調整は比較的粗いミガキである。

19は甕形土器頸部の破片である。想定される径が大

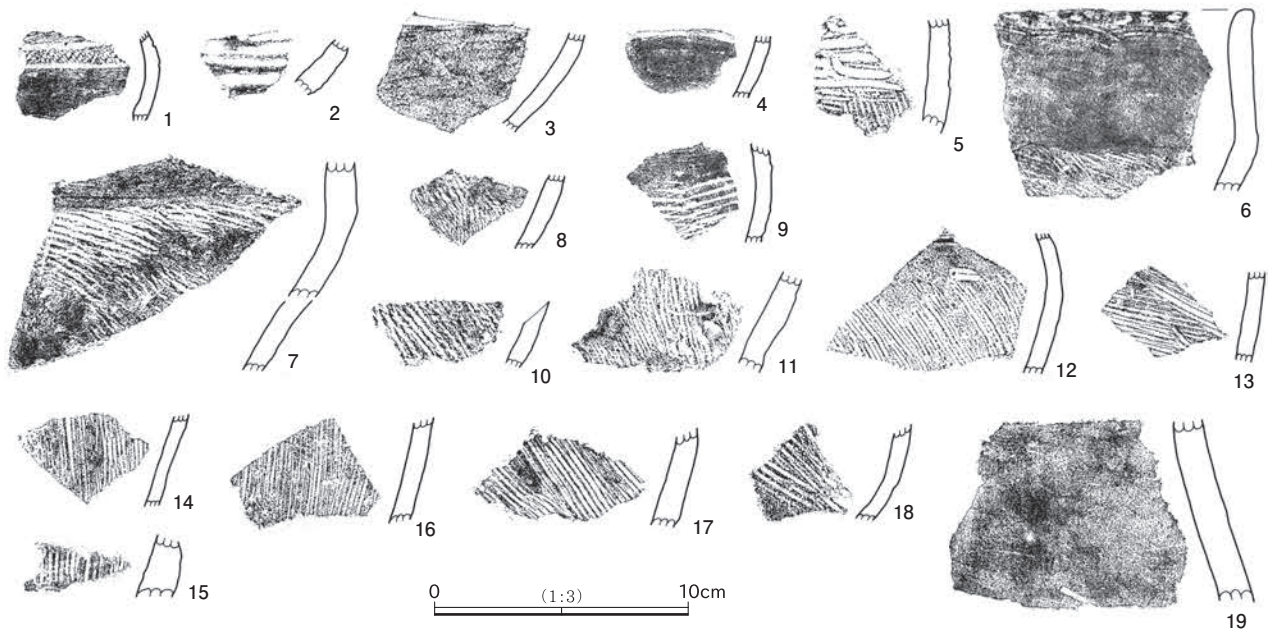


図2 縄文土器拓影

1：縄文後期後葉 2～19：縄文晚期後葉



写真5 縄文土器

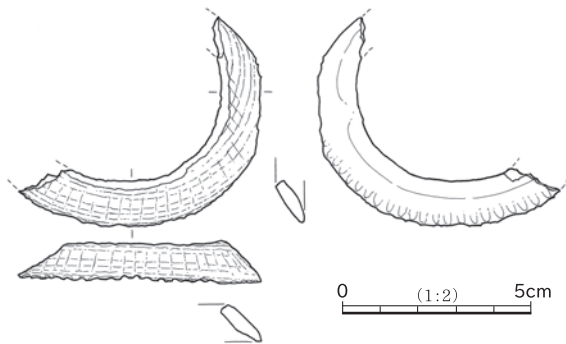


図3 貝輪実測図



写真6 貝輪

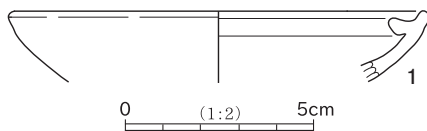


図4 須恵器坏実測図



写真7 須恵器

きく器壁が厚い。外面はケズリの後ヘラナデ、部分的には光沢のあるミガキ、内面はケズリの後ヘラナデである。なおこの頸部破片も粘土紐の外形接合によって成形されている。

3 貝輪 (図3・写真6)

ベンケイガイ製の貝輪である。約半分を欠損し、遺存長55.5mm、遺存幅63.4mm、遺存高11.2mmを測る。破断面には、径2～3mm程度の細かく丁寧に割られた痕跡が多数残されており、破断後の研磨痕が部分的に認められる。内面の腕に接する部分は平滑であり、丁寧な研磨を受けたことがうかがわれる。外面についても放射脈が痕跡的にしか残されないことなどから、全体に研磨を受けていると考えられる。

4 須恵器 (図4・写真7)

縄文時代の遺物のほかに須恵器が2片採集されたので紹介しておく。

1は坏身である。推定口径11.1cmと小型の坏で、残存高は1.9cmを測る。受部のかえりが小さく、口縁部よりもかえりの先端が低い位置にある。残存部は内外面ともに回転ナデによって調整されている。7世紀中葉の所産と考えられる。2は大甕の破片で、外面にタキメが残される。

5 龍正院貝塚の意義

本稿は少量の採集遺物を報告しただけであるが、かつての奈和同人会による発掘調査の成果に今回の採集遺物を加えて、あらためてこの貝塚の意義について確認しておきたい。

奈和同人会による調査は小規模ではあったが、第Ⅱ層(混貝土層)、第Ⅲ層(混土貝層)、第Ⅳ層(純貝層)、第Ⅴ層(混土貝層)が層位的に発掘され、各層から出土した土器に異なる様相が指摘されたことに意義があった。とくに第Ⅲ層出土土器と第Ⅳ層出土土器が「荒海1式」の細分を提起したことは重要である。荒海貝塚³⁾出土土器中の浮線文が施される浅鉢形土器については、施文が単段の文様帯を構成するものが主体で、そうしたものが荒海1式の精製土器の主体をなすと考えられるが、龍正院貝塚の調査で出土した浮線文を施す浅鉢形土器は、第Ⅲ層と第Ⅳ層の間に施文技法の明確な差が認められた。また、粗製土器の撚糸文と細密条痕の比率についても差異が認められている。

今回採集した遺物の主体を占めるのは縄文晩期後葉の土器であるが、全体的には荒海1式から3式までを含んでいる可能性がある。その中で浮線文浅鉢形土器あるいはそれと考えられる土器は2～4の3点があった。文様をうかがうことができる2については、レンズ状浮線文と推定される。これは奈和同人会の調査に対比すれば、第Ⅲ層出土土器、つまり荒海1式の新しい段階とすることができる。表面採集であるが故にさまざまな段階のものが混在するのは当然であるが、第Ⅳ層出土土器に明確に対比できるものはなかったと言ってよい。また、今回の採集資料で、粗製土器の胴部の施文がわかるものは、撚糸文6、細密条痕7(うち図示したものは6)、貝殻条痕1という比率であった。貝殻条痕をもつものは壺形土器の可能性があるので除外するとして、撚糸文と細密条痕の比はほぼ同じという結果になっている。

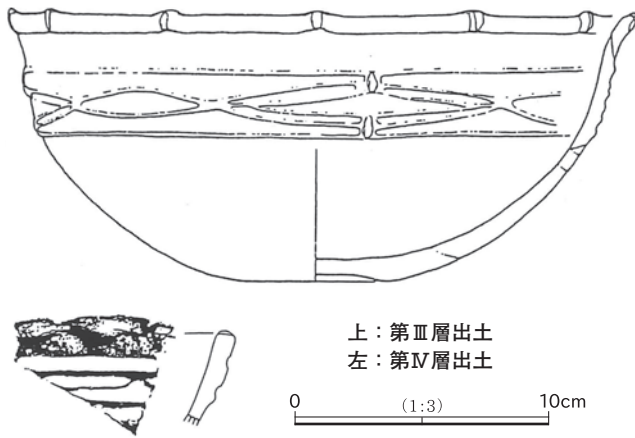


図5 奈和同人会調査で出土した浮線文浅鉢

奈和同人会の調査で得られている撚糸文と細密条痕の比率は、第Ⅳ層で6：1、第Ⅲ層で4：1、第Ⅱ層で1：2、第Ⅰ層で1：1という結果で、表採資料の比率は第Ⅰ層、第Ⅱ層に近い。おおまかに言えば、第Ⅰ層出土土器は荒海2式から4式（可能性あるものを含む）、第Ⅱ層出土土器は荒海1式から2式、第Ⅲ層出土土器は荒海1式新段階、第Ⅳ層出土土器は荒海1式古段階と仮定することができる。今回の採集資料も荒海1式から3式の幅で考えることができるが、同じ香取海周辺の低位段丘に位置する荒海川表遺跡⁴⁾や宝田鳥羽貝塚⁵⁾と同様に、荒海1式から4式という時間幅の中で幾度か占地されながら、主体となる時期が少しずつ違うという関係にありそうである。

なお、報告する遺物の中には貝輪が含まれている。貝輪は近傍の同時期の遺跡でも出土しているが、いずれもベンケイガイ製であり、今回の資料はそのデータをさらに補強することになる。

今回の表面観察で推定された貝散布の拡がりや、本体の貝層が明確に露呈していたわけではないが、表面観察ですら長径10mを超えている。10×12mという荒海川表遺跡の貝塚よりもさらに規模の大きい貝塚が形成されていた可能性が高い。また、少し離れて別の地点貝塚が存在する可能性もある。今後、ボーリング調査など可能な範囲で、この貝塚の全体像が明らかにされることにも期待したいところである。

縄文時代晩期後葉から弥生前期にかけてのいわゆる荒海式段階の貝塚は、今のところ成田市域にしか存在しない。海退が進む中で汽水化した旧長沼周辺にヤマトシジミの採取を目的とした集団立地が集中したことは首肯できるが、では他に同等の条件のエリアがなかったのかどうか。また、荒海貝塚、荒海川表遺跡、宝田鳥羽貝塚、宝田八反目貝塚⁶⁾などが旧長沼南部

沿岸に集中するのに対してこの龍正院貝塚はかなり離れており、荒海貝塚からの直線距離は約4kmである。荒海貝塚と荒海川表遺跡の直線距離が0.6kmであるのと比べると遠い。龍正院貝塚と荒海貝塚の間にも同様の目的で立地した遺跡があってもよい。荒海川表遺跡の発掘調査を行った当時の課題としている、成田市を含む香取海沿岸地域における目的を絞った分布調査の必要性は未だ解消されていない。千葉県内では集落や生業の実態が必ずしも明らかになっていない時期だけに重要な課題といえよう。

同時に、1980年代にこの貝塚で提起されていた荒海1式の細分を含む土器編年の整理については、筆者自身が長年の課題としてきたテーマでもある。この報告を契機としてあらためて荒海1式について十分検討を加え、近い将来、前後の時期とも合わせてまとめることができると考えている。

注

- 1) 柿沼修平・青木幸一 1983「千葉県下総町龍正院（大原野）貝塚の調査－下総における縄文時代晩期終末の研究－」『奈和』第21号
以下、本稿で記載する奈和同人会による龍正院貝塚の調査成果はすべてこの文献による。
- 2) 「ふさの国文化財ナビゲーション」による。
- 3) 西村正衛 1961「千葉県成田市荒海貝塚」『古代』第36号
西村正衛 1974「千葉県成田市荒海貝塚（第1次調査）」『学術研究』第23号
西村正衛 1975「千葉県成田市荒海貝塚（第2次調査）」『学術研究』第24号
西村正衛 1976「千葉県成田市荒海貝塚（第2次調査・続）」『学術研究』第25号
春成秀爾・設楽博己ほか 2021『千葉県荒海貝塚の発掘調査』国立歴史民俗博物館研究報告第227集
ほか多数
- 4) 渡辺修一・石橋宏克 1998「成田市荒海川表遺跡とその周辺」『千葉県史研究』第6号
石橋宏克・渡辺修一ほか 2001『成田市荒海川表遺跡発掘調査報告書』千葉県
- 5) 奈和同人会 1987「成田市宝田鳥羽貝塚の調査－下総における縄文時代晩期終末の研究3－」『奈和』第25号
- 6) 渡辺修一・石橋宏克 2008「成田市宝田八反目貝塚の発掘調査」『千葉県史研究』第16号